



五味康祐
陽気な殿様

文藝春秋新社

陽 気 な 殿 様

昭和三十八年六月一日発行

定価 三五〇円

著 者 五 味 康 祐

発行者 小 野 詮 造

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

目次

登場人物	牡丹	夢想二刀流	鬼気	美眸	オコゼ組	玄竜斎	女夫橋	天狗の爪	合せ鏡	乳えらび
------	----	-------	----	----	------	-----	-----	------	-----	------

七	一四	二一	二九	三七	四五	五三	六〇	六八	七六	八四
---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

川	夕	嫺	姫	鶯	密	初	わ	禪	喝	清	返	釣	陰
							た		！				
番							く	問			り	天	
							し						
所	映	々	君	餅	使	夜	物	答		寮	忠	井	謀

一八二	一七五	一六八	一六一	一五五	一四八	一四三	一三五	一二七	一二一	一一三	一〇六	九九	九二
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----

異変

一九〇

詐術

一九七

犬死

二〇四

立春

二一四

大納言

二一九

公卿劍法

二二五

本陣の夜

二二九

聖僧

二三六

蜂の巣

二四三

仙童

二五一

血滴

二五八

長七郎罷り通る

二六五

ふたり多門

二七二

大団円

二八〇

装
幀
三
井
永
一

陽
氣
な
殿
様

登場人物

一

承応元年師走二十日、二十一、二十二日と江戸に大雪が降った。

「えい、桃からうまれた桃太郎が鬼征伐を致しました咄は、既に御承知と存じますが、これには後日譚がござる。すなわち鬼ガ島より凱旋の砌、鬼共が以後悪事を働かざるよう桃太郎は鬼の女を人質として連れ帰り、犬や猿や雉子ともども手許におき申したところ、桃太郎同様にこれが成人して妙齡と相成り、鬼の娘ながら人並に物を想う仕儀と相成り申して……」

この話をしたのは田口半兵衛。半兵衛は、御側勤めの小

姓又七郎が過つて、御秘蔵の鉢植を毀した時に、驚いて若君隼之介の御前に出て、又七郎粗忽の段を言上し「差控えを命じましょうや」と伺つたら、「イヤ過失は誰にもある。其儀には及ばぬ、序手に爺、そちに側用人の心得を申聞けよう。何時もかような場合は只だ御側の者が過失をいたしましたと言え、誰々がと、名を指すものではないぞ」と窘められ、ああこの若君おわす限り、御家は万代、と感涙した老人である。

領内の百姓五平はこんな話をした。——或る所に蕪焼笹四郎という極く貧乏な、そのくせ働き嫌いな男があつた。毎日蕪ばかり焼いて食つていたので近在の者はそう呼びよつたが此の笹四郎に女房が来た。

其女は、ごく利巧な才たけた女で、良人が毎日蕪ばかり食っているのを見て、これは困つたことだべ、何とか一人前の人物にすべと、自分の嫁入道具を売払つて旅金を作つて、この通りお金が出来ました。これ持つて何処へでも行つて一仕事して来てつかはさい。その間私は家に待つてゐるからと言つた。笹四郎もそんたら俺もそうすべ、と家を出た。ところが其日の夕方帰つて来て、俺はどうでもお前が恋しくて旅に出られないと言つた。それでは私の絵姿

を画いてつかハすからそれ持つて行つたらよいと言うて、女房は自分の姿を絵に描いて夫に渡しただ。

笹四郎は女房の絵姿を持つて旅に出て、途中、女房が恋しくなると懷中から絵姿を出して見い見往つた。ところが或る峠の上に来た時にバツと風が吹いて絵を吹飛ばしてしもうた。笹四郎は慌ててその辺を探したが分らない。仕方がないから復女房の許に帰つた。女房はおまハンがそげん妾を恋しいと思うてつかはさるならもう何処へも行かないで、家で草鞋を作つて居てつかはせと言うた。笹四郎は喜んでそんだらそうすべと毎日女房の側で草鞋を編んでいただ。

笹四郎が女房の絵を風に攫われた翌日、所の殿様が、多勢の家来を連れて峠に来て、ふと或る木の枝に美しい女の絵姿が懸っているのを見つけられた。あれは何だ、取て来いと申されたので家来が取寄せたのを御覧になると女の絵だ。殿様は見て、世にもこんな美しい女があるものか、誰ぞこの女を見知つて居るものはないかと申された。家来のうちに、それは峠下の蕪焼笹四郎という者の妻でございまして言うた者があつた。それで其女を見たいと言われて俄に峠を降りて、笹四郎の家さ寄られた。見ると女房は絵姿

にも勝る美女であつたので、厭がるのを無理に自分の駕籠に乗せて館へ連れて行つただ。

笹四郎はその後で家に戻り、女房がいないので心配していると其所へ朋輩が来て、わけを聞き、そんなら俺の言う通りにすべと智慧をさずけて帰つた。

笹四郎は翌日、策に柿や木の実を入れて担いで、梨や柿やと触れながら殿様のお館の回を廻つた。笹四郎の女房はその声を聴いて、ハテ自分の亭主の声に似ていると思うて、殿様に柿売りの男を見たいと言つた。何でも女房の言うことはきく殿様だったから、早速その柿売りをお庭に廻せと家来に言うた。女房は柿売りが入つて来るのを見ると如何にも自分の夫であつたので思わず莞爾と笑つた。

今迄どんなに機嫌をとつても、どげな事しても笑顔を見せなんだ女が初めて笑うたので、殿様はこれは女はあんな装な物売りが気に入るんじゃないやと思うた。そこで喜んで、こりや柿売り、うぬの衣物と道具を皆此方へ寄せて、言つて、笹四郎からそれを取上げてしもうた。そうして自分の身につけて、自分の立派な衣裳をば笹四郎に着せて、自分の居座に坐らせた。そして自分で柿の入つたザルを担いで、はい柿や梨やと物売りの真似をして庭中を彼方此方と歩

き廻った。女房はそれを見て大そう可笑しく思うて体を屈めて笑うた。すると殿様は大きに興がって、果ては道化した真似までして、いよいよ大声に叫んで、屋敷の中を彼方此方と歩き廻った。其時笹四郎は女房に教えられて斯う声をかけた。狼藉者がまぎれ込んだア。早う外へ追い出せと言うた。その声に多勢の家来共が馳せて来て、厭がる殿様をお屋敷の外へ追い出した。

—— 次は、中小姓の原田某が、関方原に初陣した祖父の

思い出を語った。その他、紀伊侯が姦臣を刑戮された噂やら、刀の鑑定法やら、兵法修行の苦心談など、各々体験し耳にしたことを次々と隼之介君の御前に出て、物語った。

大雪にとざされた鬱屈も、此の広座敷の中だけは、時に爆笑が湧いて、倦む様子が無い。隼之介君は幼名熊之助。

三歳で母君を喪い、幼少の間は老臣伊藤忠兵衛に預けられ、同家で養育されたので、並の大名の嫡男よりは下情に通じておられる。刀剣の鑑定法などより、百姓の間のびした昔咄や、「飯は少しやわからかに炊いて飯櫃の内へおしつけてつめ、風にあてぬように致せば暑中もすえる事がございませ

ぬ」といった料理方の打明け話などに、却って興を催されるのもその故だろうと家来達は思っている。

嘗て、將軍家綱が放鷹に出られる時、隼之介は謁をうけて大手門の番に當っていたが、萌え出るばかりの萌黄色のこはくの上下に、白糸で源氏車の紋を縫ったのを着し、白柄の刀、脇差を横たえて、遠く控えたさまは、宛然雛人形のようにあつた。柳宮の奥女中どもの間で未だに噂が高い。

隼之介の父・榊原忠次は十五万石姫路の城主、夫人は筑前福岡の黒田筑前守長政の二女徳姫で、徳姫は容色優れ、その心ばえもあでやかであつたので將軍秀忠および御台所から家光の夫人にせんと土井利勝を以て、長政夫妻に内意を伝えられたが、その生年が世俗に忌む丙午なので長政はこれを辞し、のち忠次に嫁せしめたのである。

徳姫は併し入興後まもなく女子を死産し、自らも息を引き取った。そこで継室を娶ったのが隼之介の生母久昌院だつた。しかしこれ又忠次に先だつて逝つた。

忠次は平生色を好まず、この嫡室、継室の外には一生妾を置かなかつたので、晩年、病いに罹つても婦女の介抱するものなく、男子の手に終つたと伝えられるが、現在は未だ頑健そのものだ。

紀伊大納言頼宣から、嘗て出入の旗本衆を介し、忠次に

息女があれば、二男左京大夫頼頼の妻に貰い受けたいとの申込があった。忠次には嫁がすべき女がなかったので、その旨を答えると、息女がなくなれば家中のものの娘でも養女分にして貰えれば満足であるという。幸い榊原外記に娘があったが忠次は遠慮して、これを嫁せしめず、「左様のものはござらぬ」と断った。後に、

「御当家随一の忠次じゃ、たとえ女があっても御三家と縁者になることは出来ぬ」と述べたという。

二

そういう古武士の一徹さを失わぬ人だから、隼之介が生れおちるとすぐ老臣伊藤忠兵衛に預けたのだが、忠兵衛の妻は乳母となって乳を含ませた。この妻女は非常に背が低く、幼君を背負ってはよく竹馬で庭を乗り歩くので忠兵衛がたしなめると、

「妾は背が低うございます。万一、妾の乳のために若君さまの御背が低くお成りなされては一大事ゆえ、高い御氣

分をお与え申しているのでございます」

と答えた。これ亦武士の妻というべきだった。

隼之介の身長は、この妻女の祈念のたまものか、十八にして既に六尺にちかい。諸大名の嗣子が、何かの威儀に綺羅を競い一堂に会すると、一きわ、朋輩衆を抽ん出で、つばなのが隼之介である。面長で色白く、おっとりして見えるから逆も家臣の貧窮の下で育った若殿とは見えない。武芸の腕前の程は、上手か下手か分らなかった。忠兵衛が格別に主君忠次の命を蒙って招いた師範役は、名もなき一介の浪人だった故もある。初めて、將軍家（当時まだ三代將軍家光だった）に謁したのは十五歳の時だが、偶々列座していた大目付宮城越前が、しげしげと打眺めて、「それで十五とは、式部大輔（忠次）どのはよい子をお持ちなされたワ」と感嘆した。何の、実はまだ十二である。

当時、將軍家に初見の儀さえ済ませば、当人が相統前に急逝して他に子がなくても断絶、滅封のことがない。誰ぞ身内より養子を立てればつつがなく済んだ。それで大方の藩は親が丈夫のうちに、元服の成った処で表面十五歳と称えてお目見をする。是は公然の秘密だった。随って、大

名の年齢というのは案外正確には分らないが、一瞥すれば、凡その見当はつく。律気の忠次ゆえ、さすが上を欺くことなく十五歳を俟って初見をさせたと宮城越前は感服したのである。河の十二歳だ。

隼之介には小平太という兄があつたが八歳で世を早うしている。姉があつたがこれ亦夭折した。前の夫人徳姫が死産した長女の場合といい、とかく我が子の短命なのを憂えて如何な忠次も世嗣だけは世間並に取繕つた。——とはいへ、榊原は徳川股肱の臣である、それが断絶しては幕府の爲によろしからぬと信じたのだらう。

宮城越前とは別に、初謁の日の隼之介に見惚れた人物に一代の名君と評判高い池田新太郎光政がある。光政は、是非とも息女の婿にと縁組を懇望した。光政は備前三十余万石。光政夫人は有名な千姫（大坂城の豊臣秀頼に嫁した）の女で、従つて息女は千姫の孫娘にあたる。いわば將軍家外孫の家すじで、その千姫は五十六の老嫗ながら未だ飯田町御殿に存命だ。いかな忠次も、この縁談だけは断りかねたらしいが、肝腎の隼之介は一向に話にのる様子がなかった。したがって未だ独身である。部屋住みの身である。

——二十三日も雪は歇まなかつた。

却つて一そう深く降り積つて、江戸市中は見渡す限り白一色。ここ池ノ端の榊原邸から指呼の間に眺められる上野のお山や、塔堂も鉛色の空に低く霞んで見えない。天地が銀世界なので霏々と舞う雪が却つて黯く見える。

「何とも弱り申したのう」

お長屋から、目と鼻の藩邸へ詰めるのに、袴の股立を取り、素足に草鞋で、雨合羽を重ね、雪に足を没しての往反なので三河以来の勇武を矜る家中の士も些か辟易の態だ。表玄関脇へ来れば、改めて急いで足袋をはき、股立を下げて主君の登城のお出ましを待ち、跪坐せねばならぬ。

式部大輔忠次は当年四十八。今や將軍家補佐役として幕府に重きをなしているが、為人は謹嚴寡黙。その性、寛にして懦ならず、眉が実に黒々と太いが、どちらかといえば温和な顔立である。

「待たせたな」

お供衆に声をかけ、直ぐ乗物に乗った。部屋住みながら嫡男の居室へ、事もあろうに百姓や商民までが出入しているのは知っている筈だが何も言わない。

行列がしずしずと門を出ると、あとは再び、積雪に寂まり返った邸内である。

そんな中で、内庭に面して、障子に白く雪の映えた若君の居室だけは、今日も数人のお咄衆が詰めて賑やかだった。と言って同じ顔ぶれで四日もぶっ通しでは、話のたねも尽きる。そうそう御相手役に物知りがあるわけもないからである。そこで、田口半兵衛の如き苦しまぎれの桃太郎譚も飛び出す道理だが、折よく此の日は出入りの大工で芋戸の八五郎というのが、偶々積雪の為に邸内の廊でも壊れていはせぬかどうかがいに来たのがいて、究竟の者が来たと御前にかり出された。

まだ隼之介が伊藤忠兵衛のもとに在った頃から出入りした棟梁の悴で、歳は若君より少々長けた二十六。江戸っ子らしく滅法意気のいい男で、隼之介君とは幼馴染のような事を他所では言っている。将棋が自慢である。いつぞや傍近く召されたときに、隼之介君の相手を命じられ、何か賭けたが面白かろうと、

「八五郎。その方が負けなば以後十日の禁酒を命ずる。若し予が負ければ、何なりとも望みに委せよう」

隼之介が言うど、

「ようがす。わっちゃん十両頂戴すりゃいいんで」

「十両じゃな。よし」

さて将棋盤に対つたが、五手六手きして、

「予の負けじゃ、望みの通り金子を取らせよ」

と近習に命じて十両を与えた。さて又一番さしたが、その技倆はとて八五郎ごときの及ぶ処ではなかったので、八五郎べそを掻いたという。

八五郎の話すことなどは凡そきまっている。梅は遠くに植え桜桃などは近く植うべし、然らざればさくらの咲く頃は、梅の若葉にさえぎられて無念なるものなりとか、「炬燵は少し勝手よからずとも、無用の所に拵うべし。火にあたるは大い夜陰ばかりの物なれば、無用の場所にてても、さのみ不自由はなきものなり。勝手よき所にこしらうれば来客の時に妨げとなりて悪し」などと、始めは殊勝なことを言っているが、そのうち、岡場所あたりで仕込んだらしく咽喉へ餅のつまったときは鉄漿の一雫を飲めば即座に吐き出せるとか、わきがの薬には猿のおがせというのを清水にひたし置いて、度々わきの下を洗えば、わきがの根を切り一生その気なしとか、ね小べんを治すには、なめくじをひとつ、しろざとうにまぶしてのめば奇効ありとか——カタブツ揃いの家士達には結構それが面白いらしく、「八五郎。まことかい？」膝を乗出す者もある。

「ま、これぐらいでかんべんしてお呉ンなせえ」

畏^{かしこ}つて両膝揃えるだけでし、びれがきれるのだろう、丸に芋の字を染めた印絆纏を掻き寄せると、雪の積んだ庭前から匆々に退散した。その潤達さが又若君には御満足のようであつた。

大名の食事は、贅沢なようだが極めて質素で、朝は焼味噌に豆腐ぐらい。昼と晩は一汁二菜である。そのお菜を台所役人が前日に板に書いて持参する。

いちいちながめる若君がいるわけもないが、ただ多く食つたり少なく済ませたりすると、勘い時はお体の加減でもお悪いかと側近が心配するので、嫌な菜でもつとめて一定量食べねばならない。馬の訓練とか、射術の稽古とか外に出られる日は腹も空こうが、こう室内にとじ込められてはベースが狂う。その所為^{せが}だろう、八五郎が引き退つてもそれを機会^{しか}に散会になさる様子がなかつた。

そこで側用人の半兵衛に促されて、新参ながら年少の一人がこんな話をした。

——国許姫路領内の飾磨郡書写郷に、塩瀬、河原二箇所を領し、榊原家よりも稟米^{りんまい}五十俵を与えられている村井立甫なる人物が住んでいる。立甫は神君家康公の側室阿茶局

の先夫の子で、即ち越後少将忠輝（先年、譴を蒙つて流罪された）の異父兄に当るが、將軍家の所縁を以て甚だ威勢をふるつていた。同じその書写郷に、もと尾張家に仕えた菅野六郎左衛門なる者が浪人して移り住んだ。

立甫はこの六郎左衛門と懇意になり、留守の時にはすべてを六郎左衛門に頼んだ。然るに立甫の家人で伴角右衛門というものが、立甫の妻と密通し、六郎左衛門がそれとなくこれを諫めると、角右衛門は主人に告げられん事を虞れ、立甫の妻と謀り、某夜、欺いて六郎左衛門を立甫の第^{やしろ}に招いてこれを殺し、同村の大庄屋に使を派して、六郎左衛門が夜中盗みに入つたのでこれを殺したと称して、六郎左衛門の子の引渡しを求め、男子四人のうち、三人を浮田池の堤に引出し、悉く首を刎ねた。

六郎左衛門の妻は幼い末子を抱いて漸く脱出して、目下、姫路城下に来ているが——

「さて」

この時まで脇息に凭^たれ、ニコニコ顔で一同の話を聞いていた隼之介君の態度が、急に改まった。

牡丹

一

「悦之丞とか申したな」

「は」

「いつから江戸勤めを致した」

「この夏、父三太夫同道にて江戸へ罷り越してござりまする」

「三太夫は？」

「ふた月前に死去つかまつりました」

「そうか」

準之介は雪明りの障子へ反^{そむ}向けていた顔を悦之丞へ戻した。

「菅野六郎左と申したの、その尾張浪人——」

「はい」

「ムザと欺^{だま}し討たれたのに相違はないのか」

「奉行所にも吟味の由うけたまわってござれば、よも間違いはないかと」

「妻女とやらには会うたか」

「いえ……」

田口半兵衛以下、お側衆は人払いのうえ悦之丞だけが御前に残されての御下問なので、親しくお詞^{ことば}を下されるのは初めてでもあり、まるで自分が当事者か何ぞのように悦之丞は緊張しきって、御前に両手をつかえ、じっと若君の顔を見上げている。何か面白い咄^{はな}をとすすめられても、半兵衛や古参の面々のように世間ズレしている年齢でもなく、立場でもなかった。それで正直に、国許姫路を出る時から気にかかっていた菅野六郎左衛門横死の一件を申上げたのだが、まさか、これ程に若君の関心を惹こうとは思ってもよらず、更に人払いなどされると、極秘な事でも仰せつかるように思えて気が気でない。

「奉行所では六郎左がこと、綿密に吟味いたした様子であったか？」